

平成21年 7月31日現在

研究種目：基盤研究（B）

研究期間：2006～2008

課題番号：18320123

研究課題名（和文） 東地中海周辺域における都市共同体と儀礼

研究課題名（英文） Ritual and Community in the East Mediterranean Society

研究代表者

栗原 麻子 (KURIHARA ASAKO)

大阪大学・文学研究科・准教授

研究者番号：00289125

研究成果の概要：

ギリシア、ローマそしてビザンツにおける宗教・政治儀礼と政治体制との関係性を共通のテーマとして、個別・具体的な事例研究をおこなった。政治史的な事実と宗教儀礼とを結びつける際の危うさ踏まえたうえで、法と儀礼の相互関連性、パン・ヘレニックな祭祀拡大におけるポリス社会の関与、ビザンツ皇帝の即位における都市民衆の儀礼的関与といった具体的な個別事例について、シンポジウムで公開し、比較・検討をおこなった。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	4,500,000	1,350,000	5,850,000
2007年度	6,800,000	2,040,000	8,840,000
2008年度	4,500,000	1,350,000	5,850,000
年度			
年度			
総計	15,800,000	4,740,000	20,540,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・西洋史

キーワード：南欧史・地中海史

1. 研究開始当初の背景

歴史学における儀礼への関心は、儀礼の政治的利用に傾く嫌いがあった。それにたいして、儀礼は遍在し、社会的諸関係を反映するとともに、社会的現実をたいして双方向的に影響していたことを問題とすべきであった行列等の儀礼を、政治的イデオロギーが恣意的に操作していたとの前提に立ち、政治的イデオロギーのたんなる象徴とみなす研究が主流を占めるのに対して、儀礼をひとつの実践としてとらえる場合には、儀礼の担い手や、儀礼の置かれた場、そして実践をとおした儀礼自体の変容と周囲への働きかけについて

も検討されなくてはならない。従来から定期的に研究会を開く中で、本共同研究の主たるメンバーの間に上記のような問題関心が共有されるに至った。

2. 研究の目的

個々の事例について、特定の社会的・政治的環境のなかで、儀礼的なものがどのように埋め込まれ、また、影響していたのかを明らかにするとともに、古代ギリシアからビザンツ帝国にいたる東地中海世界の政治的変遷を、儀礼のありかたを通してあとづけるこ

とを目的とした。

3. 研究の方法

古代ギリシア・ローマ・ビザンツ世界について、それぞれ個別事例の検討をおこない、研究会、セミナー等の機会を利用して、比較対象をおこなった。基本的には、日程調整の必要から、通常はそれぞれの本務校において資料収集・検討を進め、年に4回程度の研究会を通して、問題関心の共有を図った。また、儀礼は学際的なテーマでもあるため、人類学の成果にも目配りをすべく、レクチャーを受けた。

また、古代東地中海世界という大きなくくりで共同研究をおこなうことで、本共同研究は、他時代の研究者にたいして、古代の儀礼研究の現状の一端を示すことのもぞまれたため、公開のシンポジウムでメンバーの外の反応も確認した上で、論考のかたちでまとめて公開することをめざした。

4. 研究成果

期間中に総括的なシンポジウムを開き、古代社会における儀礼と共同体について報告し、その成果を報告書としてまとめた。政治史を儀礼をとおして読むという当初の目的に沿って、具体的な事例を積み上げ、東地中海世界全体にかかわる問題として示すことができた。それをうけて公私にわたる結社に焦点をしばって共同研究を継続中である。

栗原は、紀元前403年のアテナイ回復民主制時の和解を、その儀礼性に注目することでギリシアにおける私的・公的な和解の伝統的形式の中に位置づけると共に、和解の誓約がその後の政治過程の実践の中で咀嚼され、再考され、アテナイの回復民主制下の市民社会の中に取り込まれていく過程を明らかにした。

桑山は、後2世紀のアテナイが「文化都市」として変貌を遂げたことに着目した。この変貌を主導したのは、ギリシア文化好きとして知られたハドリアヌス帝と考えられる。彼が作り上げたパンヘレニオンという都市同盟に焦点を当て、この儀礼集団の発展が2世紀アテナイの変容にどのようにかかわっていたのかを考察した。

小林は、6-7世紀のコンスタンティノープルのデーモスに着目し、この時期のビザンツ国家において民衆がどのようなかたちで、そしてどの程度政治に参加していたのかに関して分析をおこなった。フォーカス帝の即位儀礼の分析を通じ、皇帝の即位儀礼が、ある程度、市民たちの考えを押し量る場と成っていたということ、つまり、彼らはある程度主

体的に状況を判断し、一定の軍事力を持ち、そして彼ら自身で指示する勢力を選択していたことが、示されたのである。

井上は、アウレリアヌスの太陽神崇拝について、これまでの先行研究が、貨幣発行から神官職設置までの行為をひとまとめにして、同皇帝による太陽神国教化政策として位置づけてきたことを批判し、これらを別々の行為として分けて理解すべきであることを指摘した。アウレリアヌスの宗教政策に、太陽神一神教や太陽神をローマ帝国の最高神に据えようとする思想を見いだそうとすることを、時代錯誤的な見方として断罪した。

これらの個別研究にたいして、シンポジウムの中では、中尾が、栗原報告がギリシアにおける和解儀礼一般について論じることが果たしてできるのか、ギリシアにおける法の一体性に対する疑問を、桑山報告にたいしては、参加者にとっての儀礼の意味を、それぞれ問いかけた。また、南雲によって、即位の儀礼自体ではなく、ビザンツにおけるデーモス自体が、そもそも儀礼的な存在であったことが指摘された。これらの限界はあるものの、シンポジウムでは、儀礼構造の比較研究という本共同研究の目的と成果について、肯定的な反応がみられた。

また、当日シンポジウムでは報告しなかったが、共同研究に当初より研究協力者として参加してきた、中尾と山内による、古典期からヘレニズム期にかけてのギリシアにおける、奴隷解放儀礼(中尾)と、アスクレピオス祭祀の拡大(山内)に関する研究が成果として導かれており、これらを短い報告書として暫定的に公開した。さらにシンポジウム企画の過程で加わった南雲と佐野の、それぞれビザンツ初期の典礼(南雲)とローマにおける葬送組合(佐野)にかんする論考を加えて、できるだけ公開かつ継続的に参照されうる媒体で文字化することとし、『古代文化』誌における特集として採用された。

またこのテーマに関して、バーバラ・レイヴィック講演会(京都)、甚野尚志セミナー(富山)を開催した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計7件)

- ① 山内 暁子『「アテナイの宗教」について語ること R. Parker, *Polytheism and Society at Athens*における儀礼と信仰』『西洋古代史研究』8, 65-78頁, 2008年11月。査読なし
- ② 小林 功『『篡奪皇帝』の栄光と失敗～ビザンツ皇帝バシレイオス一世の政治運営をめぐる～』『史林』第91巻第3号、

105-120 頁、2008 年5月。
査読あり

- ③ 桑山 由文「元首政期ローマ帝国とギリシア知識人」『史窓』(京都女子大学史学会) 65、19-32 頁、2008 年3 月。査読なし
- ④ Tadafumi Kuwayama, 'Greek Elites during the Early Roman Empire: The Sense of Identity of the Senators from the Greek East', *KODAI: Journal of Ancient History* 13/14, pp. 151-156, 2007.査読あり
- ⑤ 栗原 麻子「アプラグモシュネ(消極主義)と市民性・リュシアスの法廷弁論を中心として」『待兼山論叢史学編』(大阪大学大学院文学研究科)41、1-26 頁、2007 年12月。査読あり
- ⑥ 井上 文則「パルミラの支配者オダエナトゥスの経歴」『史林』第90巻5号、733-748 頁、2007年。査読あり
- ⑦ バーバラ・レヴィック(中尾恭三訳)「ローマ時代の2つのプリュギア共同体 対比と補完」『パブリック・ヒストリー』5、14-33頁、2008年2月。査読あり

[学会発表](計7件)

- ① 小林 功「中世の地中海世界におけるキリスト教徒とムスリム: ビザンツ帝国史の立場からービザンツ皇帝テオフィロスとイスラーム世界ー」2009年7月25日。東北学院大学オープンリサーチセンター公開講演会

シンポジウム「東地中海世界における儀礼と都市共同体」(2009年4月5日、古代史研究会例会、京都大学文学研究科第7講義室)

なお、同シンポジウムの発表者および論題は以下の通り。

- ② 栗原 麻子「思い出さないこと *mnesikakein*ー紀元前403年の和解をめぐってー」
- ③ 桑山 由文「2世紀アテネの変容とパンヘレニオン」
- ④ 中尾 恭三「ヘレニズム時代における共同体と儀礼」
- ⑤ 井上 文則「アルレリアヌス帝の『太陽神』崇拝について」

⑥ 小林 功「フォーカスとデーモス」
南雲泰輔「ローマ・ビザンツ皇帝をめぐる儀礼とその周辺」

⑦ Asako Kurihara, '*idiai graphai*: A sense of community in the Athenian Polis,' in the *2nd Euro-Japanese Colloquium of Ancient World*, Tokyo, March 27-29, 2009, Tokyo (Tokyo University)

[図書](計7件)

- ① 栗原 麻子・桑山 由文・井上 文則・小林功・山内 暁子・中尾 恭三・南雲泰輔「[成果報告書] 東地中海周辺域における都市共同体と儀礼」、2009年7月、37頁、出版社なし
- ② 井上 文則『軍人皇帝時代の研究.ローマ帝国の変容.』岩波書店、2008年11月、226頁
- ③ 小林 功「7世紀のビザンツ帝国とアラブ」濱下武志(監修)、河村朋貴・小林功・中井精一(編)『海域世界のネットワークと重層性』(日本海総合研究プロジェクト研究報告3)桂書房、38-54頁、2008年5月
- ④ 山内 暁子「古代ギリシアの聖域とネットワークー治癒神アスクレピオスの巡礼者たち」、濱下武志(監修)、河村朋貴・小林 功・中井精一(編)『海域世界のネットワークと重層性』(日本海総合研究プロジェクト研究報告3)桂書房、22-37頁、2008年5月
- ⑤ 桑山 由文「元首政期ローマ帝国におけるギリシア世界の変容- 東部出身元老院議員の台頭とアテナイ-」笠谷和比古編『公家と武家 IV 官僚制と封建制の比較文明的考察』、思文思文閣出版、418-445 頁、2008年3月。
- ⑥ 栗原 麻子「古代ギリシアの社会と生活」服部良久・南川高志・山辺規子(共編著)『大学で学ぶ西洋史 [古代・中世]』ミネルヴァ書房、37-46頁、2006年8月
- ⑦ 歴史学研究会(編)、栗田伸子、長谷川岳男、オーサー・リングボム、北村直昭、太田敬子、小林 功、甚野尚志、池谷文夫、渡辺節夫、宮崎和夫、中島崇文、村上信一郎(著)、『幻影のローマ』青木書店、181-217頁、2006年

6. 研究組織

(1) 研究代表者

栗原 麻子(KURIHARA ASAKO)
大阪大学・文学研究科・准教授
研究者番号：00289125

(2) 研究分担者

桑山 由文(KUWAYAMA TADAFUMI)
京都女子大学・文学部・准教授
研究者番号：60343266

井上 文則(INOUE FUMINORI)
筑波大学・人文社会科学研究科・講師
研究者番号：20400608

小林 功(KOBAYASHI ISAO)
立命館大学・文学部・准教授
研究者番号：40313580

(3) 連携研究者

なし

(4) 研究協力者

山内 暁子(YAMAUCHI AKIKO)
仏教大学・文学部・非常勤講師

佐野 光宣(SANO MITSUNOBU)
京都大学・文学研究科・非常勤講師

中尾 恭三 (NAKAO KYOZO)
大阪大学・文学研究科・博士後期課程

南雲 泰輔(NAGUMO TAISUKE)
京都大学・文学研究科・博士後期課程